
【WA】魔族情報参謀奮闘記(仮)

弐弐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【WA】魔族情報参謀奮闘記（仮）

【Nコード】

N2973K

【作者名】

弐式

【あらすじ】

ワイルドアームズ無印の世界で魔族な男性エイルのゆるい奮闘記。いわゆるオリ主連載。無かった。見たかった。だから作った何が悪いッ！（涙目）凄くキャラが別人です。本当にもうしわけありません。原作ファンに殺されそうだ・・・OTL。だいたいレディ・ハークン参入頃からのゲーム沿い。書きたい所を書く小説なので突然場面が飛ぶ可能性アリ。作品的には完結。後々話を追加予定。*一応本編は完結。番外編追加予定？

その1 『アタツシユケースの情報参謀』

どうもハジメマシテ、エイルと申します。

何の因果か魔族の母ちゃんマザー様々から生まれ落ちたらしく、魔族してます。

戦闘能力は魔族一。下から数えて魔族一。

ジークの旦那やベルセルクのおっちゃん並のかつちよいい武器でもあれば角も立つてもんなんですが、目の前に出したるは鋼の・・・どうみてもアタツシユケースです。仲間内に「アタツクケース（笑）？」と言われるとです。

魔族内でのお仕事は情報調達と、俺独自の能力で医療なんてのも出来たり。なお「アタツクケース（笑）」とか言うヤツの医療は承っております。

「やーやー。ごほん。」

おや、お茶の間のアイドルゼット君じゃないか。どうかしたのかい？

「おう！アルハのとつつあんが呼んでたぜー。何でも例の研究が完成したト力、なんト力。例の研究って何だ？霊の研究？零の研究？」

零の研究はそこそこ哲学的なような。まあボケはいいから。それじや行こうかね。

「クカカカカ。その必要はありませんよ。」
「アルハのつつあん！」

うお！びっくりした！突然出てくるの止めてくださいよ。びっくりしますから。

「クカカカカ。それは失礼。それよりも早く研究室に来てください。とうとう彼女が完成しましたよ。」

「彼女？完成？」

レディ・ハーケンの事ですよね。さつきゼット君から聞きましたよ。おめでとうございます。

「あなたのテレパシー能力もきちんと動いてるようで。クカカカカ。いやはや自身の研究が成功を成すのはいつでも気分が良いものですねえ……。」

「え。え。」

まったく、咽が使い物にならないと聞いた時はどうしようかと思いましたが。意思疎通が出来るって素晴らしいですね。
ね。お茶の間のアイドルゼット君。

「へ？あ、ああ。話も出来ないんじゃアイドル以前のタレント未満。お茶の間のアイドルへの道は遠いからな！」

まったくだね。じゃ、俺行くから後宜しくね。お茶の間のアイドルゼット君。

「もちろん！お茶の子さいさいこのさいさい。お茶の間のアイドルゼットにまかせておきたまえ！」

んじゃ、行きましようかアルハのつつあん。

「クカカカカ。そうですね。では後は宜しく願いしますよ。」

ぐにゃっと消えてくアルハのつつあん。それじゃ、俺も。

俺もぐにゃっと消えて、その場の残りはお茶の間のアイドルゼット君のみ。

楽しそうに高笑いするゼット君が後片付けの意味に気付いて青ざめるのは後もうちょっと。

・・・アルハのつつあんの解剖後の処分はきついものがあるよな。

その1 『アタツシユケースの情報参謀』（後書き）

すみません。なんていうかすみません。超ゼットが偽物ですみません。超アル八さんが偽物ですみません・・・。

でも見たかったんだ。読みたかったけど無かったんだもの・・・。
このへんの設定で「駄目だな」という方はぶらうざばっくぷりーず。

その2 『仕事仲間とのちょっと良い関係』

どうも魔族の情報参謀エイルです。情報参謀と銘打ってますが情報調査、医療からアルハのつつあんの手伝い、ゼット君のお相手まで務めます。要するに雑用です。

かのレディ・ハーケンさんは3年前に無事稼働されました。良かった良かった。俺も最近生まれたんで知らなかったんですが人間を魔族にするって大変なんですね。アルハのつつあんがとっても喜んでました。

でも喜びようが凄かったもんで、そのうちストーカーとかになりそうでとっても心配です。

気持ちはわかるんですけどね。きついお姉さんは素敵です。最初女性とわからなくてびっくりしましたけど。鎧を着ると男性に見えるんですよ。彼女。

さて、そんなこんなで今日は俺の一番のお仕事。情報収集の真っ最中です。

街の中を散策しながらお目当てのお方を探します。

時折出会う店の方に軽く手を挙げて挨拶したり。こう言うときこの人間そっくりな弱そうな見た目が見えるんですね。誰もまさか魔族だと思わないって言う。・・・ちよつと虚しい。

アルハのつつあんに使えない咽の代わりにテレパシー機能？念話つてのをつけてもらったのは良いんですけど。コレ魔族とか通信出来るヤツ以外には念話が出来ないんですね。

ようするに人間相手とは俺はしゃべれない、と。

え？じゃあどうやって情報収集するんだって？

それはソレ。

「わんわん。」

協力な味方がついてるのであります。

「わん！」

その通りッ！ですよー。

ご紹介しましょう。俺の仕事に欠かせないパートナー3号。犬のシッター君です。

「わん！わわわん！」

宜しく。だそうです。えらいですね。なでなでしてあげましょう。

「くわうー……。」

このように犬のシッター君と俺はお話ができます。仕掛け人（魔族？）は勿論、皆のマッドサイエンティストアルハのつつあんです。魔族になる種だかなんだかを街に居る動物に植え付けて魔族にしたそうです。魔族になら俺の念話のでお話出来るんですよ。

彼等は実に優秀なスパイさんです。

んで俺はその情報をジークの旦那に伝える橋渡しをしているというわけですね。動物といえど単品でフォトストフィアまで来るのはつらいのです。

俺は一番人間に似た容姿なので適役としてこの仕事をしてます。案に一瞬だけゼットがあたりましたが即無かった事になりました。

カウボーイハットを深く被った俺はどこからみても西部の男。・・・用心の為のアタッシューケースは常に持ってますがなにか？

「・・・わう！」

あ、すみません。シッター君の情報を聞きませんとね。

「わう。わう。わう。わう。わう。わう。わう。」

ふむふむ。最近サーフ村近くのベリーケイプで地震が起きたのですか。それに記憶の遺跡にとレジャーハンターが向かったと？あそこはもう枯れてるでしょうに。

「わうわう。わうわうわうわう。」

ほうほう。修道院のお姫様はそろそろお帰りの時期なんですね。なかなか良い情報です。メモメモ。それとなんですか？

「わっわっわっわっわっわっわ。」

ふむ。古代文明博覧会……。あの超強い人間の使った兵器ゴーレムも展示される予定なんですか？素晴らしい情報です。ジャーキー・

・は無いのでベリーをあげましょう。皆で仲良く食べるんですよ。

「わっわっわー！」

それと、もう少ししたらここはきつと戦場になります。その前に皆と違う街に逃げるんですよ？それじゃ、また次回も宜しく願いますね。

「わっ！」

嬉しそうに犬のシッター君は去って行きました。ちゃんと逃げられると良いんですけどね。

しかし今回は良い情報をたくさん頂きました。これはきつとジークの旦那も喜んでくれるでしょう。情報参謀としてこれほど嬉しい事はありません。雑用で褒められても嬉しく有りません。

さてそろそろこの街におわかれの時間です。きつともうこの景色は拝めないでしょう。

さらばアーデルハイド。短い付き合いでしたがなかなか素敵な街でしたよ。

一路。進路はフォトストファイアへ。

その2 『仕事仲間とのちょっと良い関係』（後書き）

情報参謀長エイル、お仕事をするの巻き。

皆さんの見た目はW A無印基準です。特にFのスカートハーケンさんは俺の中でなかった事になってます。

その3 『アイドルデビューの裏話』

見事、ベルセルクのおっちゃんが魔族、人間の重要アイテム「涙のかけら」を人間から奪って来てから数日が立ちました。

次はなんでも雪山に行つてマザーの3つに分けられた心臓を封印してる封印の像をぶつ壊してくるそうです。実に説明的だね。

俺はと言うと、勿論情報収集ですとも。情報参謀ですからね、俺。最近ハセント・セントールって街へ行きました。アルハのつつあんからの仕事で行ったんですけどね。とっても綺麗な街で俺としては気に入った街です。

そこでいつもの場所で動物を待つてたんですが、なんとやって来たのは人間だったんですよ。

その時俺は魔族ってバレたのか！？っていう思いと俺って魔族に見えるのかッ！っていうちよつと嬉しい思いと半々な気分でしたね。ま、結果はなんというか、ただ種の植え付け先が動物から人間になっただけだったんですけどね。

人間での実用化が出来たって事はそうとう数の人間がアルハのつつあんの研究に協力させられたって事ですな。

・・・なんとなく腑に落ちないのはどして？わからん。わからない。わからないな・・・。っとなんか今次元の壁を越えたような。

とりあえず。落ち着きがてらハーケンさんの様子でも見に行こうかな。

どうしてハーケンさんの所かって？どうせなら目を潤しながら落ちて着きたいじゃないか。以上。

「??という事だ。わかったな。」

「おうよバッチリまるっとOK!ようやくこのオレ様が、視聴者の待ちに待った初デビューッ!開幕戦にずらりと並ぶ長蛇の列に一時港が使い物にならなくなる事間違いないッ!!」

おや、別にもう一人。ハーケンさんにお茶の間のアイドルゼット君じゃないか。

軽い挨拶もそこそこに高笑いしながら去って行くゼット君。何か良い事合ったんだろうね。バーソロミュー船長のスイートキャンディ号の事かな?封印の像を手に入れたらしいね。

とりあえずゼット君は放置でハーケンさんの所へ。ゼット君の賑やかな所も嫌いじゃないんだけどね。今は目の保養が第一ってことで。

「・・・。エイルか。」

そうですね。皆の雑用係エイル君ですヨ。なんだかさっき楽しげなゼット君が通って言ったんですけど何か知ってます?

「スイートキャンディ号の件で囹の任についてだったのだから。」

多分最後まで聞いてませんよアレ。封印の像を壊す事も覚えてるか怪しいですよ。

「そうだろうな。知っているか？ベルセルクの話だと守護獣の巫女ガーディアン共が邪魔をして来たらしい。あたしの狩りに相応しいか・・・」

当て馬って事ですか。そりゃあゼット君も残念です。

「道化といえどもあいつも魔族。尻拭いは自分でするだろうさ。」

・・・そのしわ寄せはやっぱり俺？

「先程皆の雑用係と言ったのは誰だったか。」

わかりましたよ。大丈夫かなあ。

その3 『アイドルデビューの裏話』（後書き）

アーデルハイド地下道？何ソレ美味しいの？色々なものをご都合主義的にぶっ飛ばし気付けばもう霊峰ゼノムまで終わってる始末。

エイルはナイトクォーターズの一員ではありませんが普通にハーケンさんとは話す中。情報、医療と兼ねてるので他魔族との交流は多い。

■エイルさんのな思

ジークフリード↓リーダー

ベルセルク↓かっちょいいおっちゃん

アルハザード↓研究熱心。研究内容を聞いてたまに引く

レディ・ハーケン↓姐さんのな感じ

ゼット↓お茶の間のアイドル。憎いあんちくしょう

頑張れ俺。（魔族さん方の口調とか）頑張れ俺。

その4 『揺れる船上飛び立つ緑』

さくつと只今ゼット君が船の先つちよでお茶の間のアイドル開幕戦を頑張ってます。

頑張れー。ゼット君頑張れー。と応援。その隙にハーケンさんは船後方にある封印の像へと向かってもらいました。

相手方は金髪の兄ちゃんと青髪の男の子、それに金髪の・・・たしかアーデルハイドのお姫様だっけ？です。ゼット君の語りに魔族と聞いて堅くした力が抜けてるのがわかります。確か今まで彼等が出会ったのはベルセルクのおっちゃんにアルハのつつあんだったバズ。びつくりするよね初めて会うと。

船の近くに小舟を寄せて俺は待機しています。だってゼット君に勝てない俺が行っても役不足ですからね。おとなしくゼット君の退却を待ちましょう。

小舟からの見解なので違う所も有ると思うのですが。ふむむ。あの金髪の兄ちゃん、ザックでしたっけ？の早撃ちと言われる神速の居合いがどうもハーケンさんのと被るんですよ。気のせいかな。気のせいでしょうきつと。

そうこうしてる間に船上の戦いに決着がついたようです。さすがに3対1はキツかったようです。2、3言の後ゼット君が船の先つちよから飛び降りました。

フォトストフィアまで泳いで帰るつもりでしょうか。途中で凍り付いてしまいますよ。

えっちらほっちら小舟をゼット君の元へと移動させます。っと。捕まえました。

船上ではハーケンさんが現れたと守護獣の巫女達は船後方へと向かったようです。今のうちなら引き上げても大丈夫でしょう。

ザパッ

「つぶはッ！」

このまま泳いで帰るつもりですかお茶の間のアイドルさん。

「ようエイルの兄ちゃん！なんでこんな所にいるんだ？」

ゼット君のアイドルデビュー戦を見に来たんですよ。後ゼット君回収と。

「そうか！いやぁお茶の間のアイドルとしてさっそうと登場。シャッキーンッ！・・・としたのは良いものの数の暴力でボッコボコ！こんな事が許されて良いのか、いや、良くないッ！（反語）」

はいはい。今はそれよりさっさとフォトストフィアに帰りますよ。後の事はハーケンさんがやってくれるようですし。

「ん？ハーケンの姐さんが？ん？」

さて、それじゃアルハのつつあん直伝の移動技でフォトストファイアまでひとつ飛び・・・までは無理だけど対岸まで飛びましょね。

「今日はオレ様のデビュー戦。んでもってハーケンの姐さんも来て・・・ん？」

1、2のほいと。

はい対岸。それじゃもういっちょ飛びますよ。疑問やらやは後で聞きますから。

後々囿の件に気付きますかね。次回を楽しみにしてますよ。お茶の間のアイドルさん。

その4 『揺れる船上飛び立つ緑』（後書き）

お茶の間のアイドルデビュー戦。・・・ここの手。ハズ。

攻略本片手にプレイを思い出しながらの投稿なので一ミリもゲームの台詞と被らせる気はない。

ロディ達と一方的に遭遇。知ってたか、ロディは15歳なんだぜ・・・？（16～18だと思ってた・・・。）

その5 『エルウの花園』

どうも情報参謀エイルです。

今日は情報参謀らしく情報収集のお仕事です。今日の収集場所はタウン・ロゼッタという町なのですが、なんでもこの街には魔族がかつて敵対したエルウが住んでるらしいんですよ。な、なんだってーッ！ですよ、まったく。皆さんが言う事には俺達に被害は無いとの事です。

・・・エルウって言ったらガーディアンブレードって武器で魔族をばっこぼこにした種族じゃないですか。正直怖い。

そのエルウが居る街に今来てるんですけどね。早く連絡係の子来ないかなー！。

さくさくさくと散策。右からも左からも町民からはエルウを恐れる声や罵倒するものが聞こえます。どうやらエルウはこの町に受け入れられてないご様子。

人間からみたらエルウも魔族も一緒なんですかね。そう思うと少し親近感が・・・湧く事は湧くんですが怖いものは怖いですね、やっぱり。

しかし町長の息子には仏のエイルもイラつときたり。何も言いませんでしたけどね。何も言えないとも言うんですけどね（咽事情的に）。

おや、町長の息子達が階段の下へと駆けて行きました。そっちはエルウが居るって言ってたような。

とととと・・・とこっそり階段を降りて行きます。コレも情報

参謀長の仕事の内です。空気だ、空気になるんだ、俺ッ！

こっそり覗けば・・・あれ？あれって噂の守護獣の巫女さん方ではないでしょうか。なんというエンカウント。どうか見つかりませんように。切実にみつかりませんように。

・・・どうやら町長の息子達がエルウを虐めに来た様子。散々なこと言ってくれますねー。それにエルウは言い返せない様子。さて、守護獣の巫女さん方はどうするんでしょうか。

つと、青髪の男の子が町長の息子達に近づいて行って・・・！？は、叩いたーッ！！俺の胸がすつきりしたッ！驚く町長の息子達。そのまま俺の前を走り去って行ってしまいました。いやあすつきり。にしてもエルウの女の子を人間が守るとは、この町の人間がおかしいのかあの人間がおかしいのか・・・どっちも正しいのが人間なんでしょうかねえ？人間ってのは俺には理解できないなあ。

そのまましていると守護獣の巫女達が俺の方へ向かって来たので急ぎつつ静かに階段を昇ってカウボーイハットを深く被ってやり過ぐす。

エルウの女の子が町長の病気を治す薬を町長に持って行くのだとか。エルウの女の子の名前はマリエルと、よし、覚えた。

またこの町へ来た時は花園にお邪魔しようかな。

「にゃ。」

聖森の塚のエルウの装置の存在を守護者の巫女さん方が知ったと。了解、皆に伝えておくよ。後何かあるかい？

「にーにゃー。」

ヴォルカノントラップ？お宝？・・・ガーディアンブレード？？？あ、ベルセルクのおっちゃんか。ガーディアンブレードは大分前に暴走して大地を魔族ごと砂海に変えた後ぶっ壊れたハズだもんね。ゼット君もお茶の間のアイドルの出番だぜッ！ってつるはし片手に言っただけ、成功すると良いね。

「んにー。」

よしよし。情報収集ありがとう。マタタビ・・・はないからやつぱりベリーをあげるよ。

「にゅにゅ。」

可愛いなあ。それじゃ、もう俺は行くね。

おっと守護者さん方も町長の家から出て来たようだ。さっさと町をどうかな。

町の出口へと歩いて行くと前方に金髪の女の子に老年の出来るツ！っていう雰囲気の男性が・・・ところで14歳って少女？少女？そそくさと彼女等の隣を抜けて行きましょう。通りがてらヴォルカノントラップの話が聞こえて来たり。彼女等が守護者の巫女を釣れてってくれるようです。間違えた、連れてってくれるようです。アルハのとつあんが策をベルセルクのおっちゃんに与えたらいいけれど、彼女等は生きて帰れるかね。

その5 『エルウの花園』（後書き）

マリエルの話。 152cm34kgにびっくらこいた。
Fだとさらに町から遠い場所に住んでるマリエルさん。 うっかり町
長の息子達をボムで囲うとか、一度はやってしまう。

その6 『ふわふわもここの欲望』

封印の像3つをぶっ壊して魔族の母マザーが復活ッ！したものの我らがリーダー、ジークの旦那がなんだか考え込んでいました。

俺達魔族の目的はこの星、ファルガイアを無くした故郷、ヒアデスの代わりとする事です。ようするに星侵略ってこと。

ところがどうやらマザーはこの星をひたすら破壊しつくすつもりでいるらしいんですね。正直困る。とても困る。

さらに星を破壊した後俺達もマザーに食べられてしまうそう。さらに困る。ものすごく困る。

それについてジークの旦那は悩んでるご様子。どうするんでしょうか、俺はとりあえず死にたくないんだけどなーっとは思ってます。

・・・先日のヴォルカノントラップでベルセルクのおっちゃん死んじゃったしなー・・・。代わりにブーメランっていう・・・同族殺しとも言われる魔族さんがやって来ました。うーん、ベルセルクのおっちゃんに止めさしたのブーメランなんだけどなー・・・。つれてる犬（違う）のルツシーは可愛いんだけども。

わきわきわき。

「！・・・ッ」

引かれてしまった。ショック。あの毛皮をもふもふしたい。

詰め寄っても引かれちゃうのでさっさと仕事をしようと思います。

欲望の守護獣なら俺のこのもふもふしたいっていう欲望を叶えてく

れても良いと思うんだけど。
とりあえずアルハのつつあんに呼ばれてるのでアルハのつつあんの所へ向かおうと思います。

お、いたいた。アルハのつつあん。

「おや、エイルですか。」

そうそう。皆の雑用係エイル君ですよ。で、俺にして欲しい仕事って何ですか？

「暫くコートセイムに流れの旅人として潜伏して欲しいですよ。」

コートセイム？良いですけど、何かあるんですか？

「クカカカカ。それは行つてのお楽しみですよ。それでは良い報告をお待ちしていますよ。」

え。情報それだけですか？・・・ありや、行っちゃった。
結局何をすれば良いのか良くわからなかったんですけど・・・。と

りあえず言われた通りにコートセイムに向かいましたよっかね。

その6 『ふわふわもここの欲望』（後書き）

コートセイムとタウン・ロゼッタがごっちゃんになるとです。何故。説明文の少なさにつくづくWA知らない人に優しくない小説だなと思った。

その7 『ルーンドライブ争奪戦1』

どうも、情報参謀エイルです。今コートセイムに来ています。来た翌日に守護獣の巫女さん方がやって来ました。宿屋は孤児院を借りるしか手は無いとです。要するに鉢合わせしたとです。

御飯時はなんかパーティーするらしいです。食欲がありませんと丁重にお断りしようと思ったたらお断りをお断られてしまいました。ナンテコッタイ。でもカウボーイハットは深く被って外しません。行儀は悪い。

結局晩ご飯を一緒にする事に、なんでも守護獣の巫女さん方はルーンドライブ平たく言うとな出力をものすごく上げるといふ凄いアイテムを手に入れたそうです。ものすごく狙われるフラグが立ってるんです。

気付けば俺の目の前には酒が置かれて、「飲めッ！」という気魄とオーラが見えます。さらに隣からは出会ったのかブーメランの悪口が聞こえて来ます。同意させようとして来ます。止めて！。

お隣の女の子、守護獣の巫女だと言うセシリアさんに助けを求めてみました。やきそばに夢中でした。

さらにお隣のARMという銃を使う青髪の男の子ロディ君に助けを求めてみました。既に居ませんでした。常識人ーッ！

気付けばこの家の娘だというタウン・ロゼッタで出会った(すれ違った)女の子、ジェーンさんも居ません。あれ、これロディフラグじゃね？

執事だと言つ老年の男性、マクダレンさんはのんびりとマイペースにやっていますし。どうやらここに友軍は居ない様子。

とりあえず隣でうだうだ言ってる金髪の剣士の男性ザックさんを止めましょう。止めてくださいカゼネズミのハンペンさん。あなたの相棒でしょう？この人。

しかし残念ながら声は出ないので目線で訴えるのみ。最初声出ませんとロディ達が知った時なんだか重たい空気になったりして新鮮でした。うちだと誰も心配なんてしませんしね。

口が駄目なら手で止める。ささつとザックさんの口と鼻をつまみ、止めました。いろんなものを。

じたばた暴れてちよつとした頃に手を離しました。コレでちよつとは静かになるでしょう。青ざめてるのは酔ってるからですねわかります。

する事が無いのと本職に医療も入ってるので、ザックさんを介抱しました。3割程は俺に負があるかなとは思ってますよ？吐かれると困りますし。

ベットまで連れて行って、俺もさつさと寝ようと思った所になんだか見知った気配を感じました。これはアルハのとつたあんですね。俺の予想通りルードライブはフラグだったようです。

しばらくしてアルハのとつたあんの気配が消えました。その後慌てたようにロディ君とジェーンさんが帰って来ました。ほんと、アルハのとつたあんはいい雰囲気邪魔するの好きですね。

どうやらアルハのとつたあんはルードライブを渡さないとコートセイムの村人を皆殺しに言ったらしいです。コレがアルハの

とつつあんの言ってた面白い事なんでしょうか。

村人皆はひとまずバリアが張ってあつて安全な結界のほこらへ避難する事になりました。俺も勿論避難です。

アルハのとつつあんはコートセイムに潜伏しろと言っていました。

村人と一緒に行動しろという事なんでしょう。さて、何があるんでしょうかね。

その7 『ルーンドライブ争奪戦1』 (後書き)

コートセイム+ロディ達と顔合わせ。一度は友好的に出会っても良
いかなど。帽子は外しません。

その8 『ルーンドライブ争奪戦2』

結界のほこらに着きました。平たく言うとアレです。阿鼻叫喚です。

結界のほこらにはいつて少しすると突然、安全なハズのほこらの中で魔物に出会いました。いや、魔族である俺が入れる時点で安全じゃないとは思ってたまいましたが。

実は魔族って体が機械で出来てるだけで構造は人間と同じなんですよね。人間が入れるバリアは魔族も通行可能って言う。でも確か魔物は入れなかったような。コレがアルハのつつあんの言った面白い事でしょうか。

突然の魔物の襲来でちりぢりになって逃げた俺達です。俺も逃げました、逃げないと不審ですので。

今は3人の子供に囲まれたシスターと共にとある一室に隠れています。外は魔物でいっぱいです。

泣きじゃくる子供達、一生懸命相手をするシスター。俺はみてるだけです。子供の相手なんて出来ません。

もう隠れてからずいぶんと時間が経ちました。ロディ達も結界のほこらに来ているかもしれませぬ。

アルハのつつあんはおそらく俺にこの事件の事を報告させる為にコートセイムに潜伏しろといったのでしよう。なら仕事の為にそろそろ動いた方が良さそうです。

シスターに身振り手振り、ついでに文字も書いて伝えます。

驚かれました。まあ危険な魔物の中に一人で出て行くって言ったんだから当たり前でしょう。

それでも旅人です。てか魔族です。後者は文字にしませんでしたが納得してくれた様子。この外の魔物はだいたいコートセイム周辺の

魔物と同レベルでしょう。システムの。
隠れているように。そう言って俺は部屋を出ました。とりあえずここは奥に進むのがセオリーでしょう。迷う事無く階段を下って行きます。

つつか奥まで進んで行きます。早くしないとロディ達がやって来て事件を解決してしまいそうですしね。

そうこうしてる間にずいぶん奥まで来てしまいました。扉を守るように立つ男性。コートセイムに居た方ですね。晩ご飯の時に居たと思います。

話しかけようとして、俺の背後から足音が聞こえてくるのに気付きました。やってきたのはロディ達です。もう来るとは、早いですね。

「ルードライブは大丈夫ですか!？」

「この奥にあるんだろう!？」

あ、そうだったんですか。ダンジョンは奥に行くのがセオリーです。で理由とか考えてませんでした。

一人で来たのかとロディ達が心配してくれました。大丈夫です。俺には心強い味方のアタッシュケースがありますから。ええ、ばこばこ殴っては逃げてました。

セシリアさんが扉の前の男性に話しかけています。

・・・！？

男性の様子がおかしいです。頭を抑えています。苦しそうです。どうしたんでしょうか。

そうこうしている間に、男性の背中の一部が盛り上がりました。ソレと同時に男性の中の何かが変わって行くのがわかります。

その何かによって男性のすべてが何かに変わった時。

そこに居たのは男性では無くなっていました。

君はだれでしょうか。

そうですね、俺は良く知っていますね。良くお仕事で君たちの力を借りています。

君は、もう???

????人間では、ないんですね。

その8 『ルーンドライブ争奪戦2』（後書き）

結界のほこらはFだとバリアシエルターという名前です。アルハの
とつつあんはどうしてもこの話は外せない。後もう一個はその内。
作者はアルハザードが大好きです。Fの彼の3Dは良くやったと思
った。

その9 『宣戦布告ッ!』

アルハのとつつあんによつて種を植え付けられた動物は魔物になります。発芽前なら支障は無いんですけどね。発芽後の利点ってなんでしょう。俺と話が出来る事ですかね。

結論から言つてルーンドライブは守られました。でも人間はとっても後味が悪い様子。でも、そうですね。そうですね。

いつもお手伝い願つてた彼等がこういう風に生まれたものだと思うと不思議な気持ちになります。なんでしょうね、これ。どこかで忘れて来たものでしょうかね。

コートセイムでロディ達とおわかれしました。ロディ達はゴーレムの一つであるアースガルズを手に入れたそうです。ソレで魔族を倒すんだと言つてました。

俺は頑張つてくださいね。としか言えません。彼等はその足でフォトストフィアへ向かうようです。

俺は一旦フォトストフィアと逆方向へ歩いて、しばらくしてから瞬間転移でフォトストフィアへと帰りました。

以上が報告ですね。というか自分で行かれるなら俺行く意味なかったじゃないですか。

「クカカカカ。住民から見てもどのように変わるのか見たかったので

すよ。素晴らしかったでしょう？ご苦労様でしたね。」

・・・素晴らしかったですよ。さて、聞きたい事があるんですけど。ジークの旦那の決定でマザーを人間に打ち取らせるって本当なんですか？

「ええ、そのようです。私も滅ぼされてしまっただけは研究が出来なくなりますしね。一応フォーストフィアのトラップは動いています。」

そうなんですか。それじゃ俺の出番はありませんね。

「・・・そうでも無いのでは？」

あら、ハーケンさんこんにちは。そうでもないってどうですか？

「???ジークフリードからの召集だ。」

あれ。

ちよつと遠い所でフォトストフィアが海に沈んで行くのが見えます。短い間だったけど我が家が沈んで行くのはちよつとブルーになりますね。となりでお茶の間のアイドルが楽しんでますが。

さて、今俺はいつも情報収集に行くときの渡り鳥の服装ではなく魔族としての格好をしています。なんでかと言われますと、この後沈没寸前のフォトストフィアから脱出したロディ達に宣戦布告をする為です。

ちよつと前に出会ったばかりなのでバレるかな？と思いましたが、そんな事はありませんでした。

むしろセシリアさんに「人間！？」と言われました。ゼット君に否定してもらいました。喋れないって辛い。

つい先程まで好意的な態度をとられた方々から全力の殺意をうけるとさすがに身にこたえます。ザックさんはハーケンさんを睨んでますが。恨みでもあるんでしょうか。一番居た期間が長かったのだからを向かないのは好都合です。

と思ったらこつち向きました。こつちみんなッ！という気分を目を合わせないように頑張ります。・・・長い。お、そらしてくれました。よしよし。

先程も船の上で魔族に恨みがあるとか言っていましたしね。何が合ったんでしょうかね。俺は知りませんが。

宣戦布告の後、俺達魔族はさつさと次の本拠地へと向かいました。ゼット君はまた泳いで帰らないようにつかんで瞬間転移しました。二人掛かりだと距離が落ちるとです。

海に落ちました。磯の香りが本拠地にふんわり香ったとです。

その9 『宣戦布告ッ!』(後書き)

さらっとマザー戦終了。エイルの能力説明をする合間が無い!アタッシュケースの説明をする暇が無い!!その内説明するハズ。

その10 『ダークネスティアの黒い輝き』

どうも情報参謀エイルです。ハーケンさんの様子がおかしいとです。

アルハのとつつあんの怪しげな研究所デモンズラボにてお手伝いをしています。薄暗いよとつつあん。フォトストフィア並みに薄暗いよとつつあん。

アルハのとつつあんの研究機材と薄暗さが相まって良い感じに。あの意味駄目な感じに。

それはともかく、俺の目の保養兼潤いなハーケンさんがなんだか最近様子がおかしいとです。

ロディ達に会ってからおかしいなと思ってたんですが会えば会う程酷くなってる気がします。はッ！まさか恋煩い！？まさかお相手はザックさんか！？それともロディ君なのかッ！！

・・・愛用の鎌アズラエルで叩かれました。痛い。

「クカカカカ。仲がよろしいようで。」

アルハのとつつあん。どうかしたんですか？

「お客様です。丁重にもてなしてあげてください。」

・・・お客様の心当たりは？

「あなたの察しの通りですよ。クカカカカ・・・。」

というわけで、只今ハーケンさんが丁重におもてなししています。俺は隠れてみてます。アルハのとつあんからはハーケンさんが負けたらダークネスティアとハーケンさんを回収するようになると言われています。要するに出番待ちの待機ですね。

ダークネスティアってのは、でっかい涙のかけらのイミテーションです。アルハのとつあんが作ったヤツ。用途は俺も知りません。まだ完成じゃないらしいですけど。

ハーケンさんがザックさんと打ち合う音が聞こえます。どちらの剣も早すぎて見えません。そんな中負けたら回収しろとか無茶言わないでください。

ロディ君がばかばかARMを打って来ます。散弾のヤツとかいつこつちに被害が来るかひやひや物です。

セシリアさんはどっこんどっこん魔法を打って来ます。あなたの魔力は底なしですか。

・・・ハーケンさんが押されて来ました。さすがにロディ達も強くなってるという事でしょう。そろそろハーケンさんの体力的に不味いハズ。要するに俺の出番です。お茶の間のアイドルには悪いのですが出番要らないです。

「お前の力、そして強さ、見せてもらったぞ。」

ハーケンさんがロディ達に背中を向けて??倒れました。すかさずハーケンさんを瞬間転移します。

一瞬の内にハーケンさんは俺のすぐ前。場所で言うところの部屋の外に移りました。今奥ではアルハのつつあんがロディ達の相手をしているハズです。

この研究所は廃棄されるでしょう。次の研究所は知りませんが、安全な場所へ行く前に応急処置だけ施しておきましょう。なに、ほんのすぐです。時間はかかりません。

ようやくと真っ直ぐハーケンさんを俺はみました。いつもの鎧姿は無く、俺が初めてみた服装、姿のハーケンさんがそこに居ました。アタッシュケースの中を開けます。開けるだけで周囲の方々を回復させるチートアイテム兼俺の相棒、魔鞆メデイスンです。そこ、かつこわるいと言わない。

応急処置だしこれくらいで良いでしょう。後はアルハのつつあんと合流するだけです。

俺はハーケンさんを背負いました。俺の後ろから悔しそうな声と床を殴りつけるような音が聞こえます。

後ろ髪引かれる思いというんでしょうか。振り返りたい衝動を抑えた俺は真っ直ぐにアルハのつつあんと待ち合わせ場所へ転移しました。

その10 『ダークネスティアの黒い輝き』（後書き）

初のゲーム忠実台詞。ちゃんとゲーム画面見てから書きました。いや、ここは見ないと駄目だなと思ったので。

その11 『いけッ！パンチだッ！』

ハーケンさんはアルハのつつあんに連れてかれました。俺は一人ゲートジェネレーターにきています。いや、ゲートジェネレーターに居るゼット君のサポートをしています。

なんでもデモンズラボをぶっ壊した後のロディ達をジークの旦那がわざわざゲートジェネレーターに呼んだそうです。俺はそれに捕まって人手が足りないからとここに居ます。

普通俺がハーケンさんの治療をしてアルハのつつあんが居るべきなんですけど、ハーケンさんは普通の魔族と違うので、その辺り難しいんですよね。俺もいろいろ違うらしいですけど、咽とか。

そんなこんなで今ゼット君と一緒にいます。頑張ってジークの旦那に頼まれた足止め作戦を練っているようです。頑張ってね。俺はソレしか言いません。

俺の仕事はゴーレムのディアブロを起動させる事なのです。ゼット君にはそのへん難しいだろうってジークの旦那が言っていました。俺もそう思います。

「ようし！かつちよいいオレ様のかつちよいい作戦ッ！完璧無欠の作戦に彼奴等も慌てふためく事間違いないッ！んじゃエイルの兄ちゃん後宜しく！」

はいはいはい。いつてらっさい頑張ってね。

お茶の間のアイドルを舞台に送り出した後、ディアブロの調整に専念しました。作業がはかどります。

しばらく後、ゼット君が部屋へと駆けて来ました。全力疾走して来たようですね。

「兄ちゃん！ディアブロは！？」

準備万端ですよ。

「ようしこれで心配要素は一切なくなつたッ！やっぱりオレ様完璧無敵ッ！強いぞゴーレムッ！かつこいいぞッ！！」

策は失敗して来たようですし、時間稼ぎは難しいですね。とりあえずディアブロに頑張ってもらいましょう。

ゼット君が駆けて来た入り口から3人分の足音が聞こえて来ました。さてはて、出番ですよディアブロ君。ゴーレムの強い所、見せてくださいね？

結論：だめでした。

いや、ディアブロ君は頑張ってくれたんですけどね、それ以上にロディ達は強くなっていました。これは完全に俺に勝ち目はないですね。

最後の悪あがきとゼット君がパスワード作戦を決行するも自分の名前を迷わず入れたザックさんに完敗。この人パスワードとか見たら手当り次第に自分の名前入れてるんじゃないかと不安になって来た。さっさと逃げてジークの旦那が居る部屋の前まで逃げて来ました。ジークの旦那に扉を開けてもらいます。同じくロディ達もこの部屋に来ました。戦いは避けられないようです。

「おゝのれ、おのれッ！このオジャマ虫どもがッ！俺の出世シナリオにアカ入れるとは不屈き千万ッ！反省する前に死刑執行ッ！！」

ゼット君の発言からこの場が始まりました。俺ですか？ちゃっかりゼット君の後ろにいます。当たり前です。無理です。勝ち目がありません。後ゼット君死刑じゃなくて私刑だと思いますソレ。

「生まれ変わった不死身のカラダ。アルハザードのくれたパワーを見るがいい。いくぞおッ！怪力招来……ッ！！」

いつの間にそんな事を！？でもちよつと興味があります。アルハのとつたあんということでも不安も大きいのですが。

「さがっている道化者・・・」

ゼット君が怪力招来をしようとした所、ジークの旦那が止めに入りました。結構酷い事をすけすけ言ってます。でも今までの形跡を見るとちよつと否定出来ません。

ジークの旦那も俺達魔族の事を思つて戦つてるんですね。だから破壊しようとしたマザーを裏切つたんですし。

そうこう思つてる間に戦いは始まりました。なんだか最終決戦のよくな雰囲気です。事実、それに近いものだと思いますが。

俺とゼット君は見てるだけです・・・ジークの旦那が勝つのでしようか、それとも人間が勝つのでしようか。

ただただ、俺とゼット君は戦いの行方を見守りました。

その11 『いけッ！パンチだッ！』（後書き）

戦闘描写なんて能力俺には無い。今回ゲーム忠実台詞が多いです。
多くないと、ここはゲーム画面気にしながら書かないと。

その12 『零れ落ちる水銀』

ガチンッ！

魔槍グラムザンパーが地に落ちる音がします。そう、この戦いの勝者が決まった瞬間です。

勝者は????人間です。

ジークの旦那が片膝をつきました。相当の傷のようです。満身創痍なのは向こうも同じようですが。俺は治療しようかしまいか悩んでいました。このままではジークの旦那所か俺まで死にそうです。今までの俺ならすぐにジークの旦那を助けて戦ってもらっていたでしょう。

ひっかかるのは今まで俺が見て来たすべて。

「フッ、勝ったと思っているのか？人間よ・・・」

ジークの旦那が立ち上がって、ようやっと俺は魔砲メディスンの蓋を開ける事が出来ました。この様子だと時間がないので応急処置程度にも回復できません。

それでもジークの旦那は喋り続けています。

「そうだ、私の夢がこんなところで終局を迎えるはずがなろう・
・第2ラウンドの開始といこうじゃないか。」

2ラウンドは無茶ですってッ！そう言おうとした俺よりも早くジークの旦那は次を口にしました。

「ゼットオツ！！ジェネレーターをフルドライブさせろ、出力200%で、だッ！」

まさしく開いた口が塞がらない。本当に塞がらない。すでに響きで察しの通りかなり危ない事をやれとジークの旦那は言ってます。出力200%。そんな事をすれば凄い事になります。どう凄いかって言つと。

「・・・そうだ・・・疑似ブラックホールが発生するだろうな。」

ですよねーッ！！

ロディ達は意味を良く理解してないのでしょうか。それともその覚悟でここに居るのでしょうか。

ジークの旦那はもう覚悟を決めているでしょう。ゼット君も、今は渋っていますがおそらくジェネレーターをフルドライブさせるでしょう。さて、俺は？

「・・・こうするしかないみたいだなッ！」

ゼット君はジェネレーターを稼働させようとスイッチに手をかけます。それを止めようとしたロディ君はジークの旦那が出したチェーンで左腕を掴まれてしまいました。

さて、俺は、どうしようか。

ゼット君の後ろに居た俺。実はかなり装置に近い位置に俺は立っていました。俺に装置のスイッチを押せとジークの旦那が言わなかったのはおそらく、俺じゃ押せないだろうと思ったからでしょう。

・・・ところがどっこい。俺は男の子です。

覚悟を決めるときは決めます。

ゼット君が乗つけてるスイッチの上から、俺は

相棒のメデイスンを思いつき振り下ろしました。

「いってえええええええええええええええッ！！！」

あ、ごめんね。コレくらいで壊れる装置じゃないし大丈夫だよね。
さて、賽は投げられました。さじもついでに投げたのでこれからどうなるのかわかりません。

俺の背後に出来た疑似ブラックホールはどんどん大きくなって行きます。もうすぐ俺もゼット君もジークの旦那も、目の前のロディ達も飲み込むでしょう。

「逃れるすべは無いぞ……。さあ、私と共に次元の隙間の旅行を楽しもうじゃないか。」

ロディ君は必死に手に巻き付いたワイヤーを切ろうとされていますが
なかなか切れません。それでもめげずに、切ろうと・・・!?

「バカなッ！自分の左腕をッ!？」

い、痛いッ！！思わず自分の左腕を握ってしまいました。あれは痛
いってレベルじゃないですよ！？隣のゼット君も啞然としてます。
ロディ君の心配するセシリアさん達。そうこうしてる間にどんどん
背後の疑似ブラックホールが大きくなります。

天井を、床を、疑似ブラックホールは飲み込んで、そして???

その12 『零れ落ちる水銀』（後書き）

ゲーム見ながらだと書きにくい事に今気付いた。

その13 『夢の霞と一方通行』

目の前が真っ暗です。良く見えません。

遠くの方で何かが見えた気がしました。気のせいでしょうか。

いま、またみえました。何処かでみた事があるふうけいです。

どこかなつかしいそのふうけいは、どんどんしろく、そまっていきました。

そして、完全に白に包まれたその時。俺は夢から覚めたのです。

「大丈夫ですか？」

だ、だいじょうぶです？

目の前の金髪の少女に声をかけられました。返したいけど彼女は人間の用で、ようするに俺の声は届きません。

「？大丈夫ですか？」

返事が無いのを不思議に思ってたが、さらに声をかけられました。言葉では無理なのでボディーランゲージをッ！と思って目の前の彼女の顔を見て、

？？焦点の定まらない瞳に、俺はどうやってコミュニケーションを取ろうか小一時間悩みました。

その13 『夢の霞と一方通行』（後書き）

方や目が見えない。方や喋れない。意思疎通とか一方通行。

その14 『にくいあんちくしょう』

金髪の彼女の名前はアウラだそうです。と、いうのを遅れてやって来たお茶の間のアイドルゼット君に先程聞きました。

そしてここがセント・セントールと言う事と、彼女が唯一の生き残りという事も。

そういえばセント・セントールが壊滅したって聞きましたね。この町は封印の像もありましたし。生き残りがいるとは思いませんでしたが。

「この町が壊滅したって聞いた。生き残りがいるとは思わなかったてよ。」

「私もここに居るように言われてから外を歩いた事はありませんでしたし……。でもたまに人は来るんですよ。」

へえ、もの好きな人たちですね。

「全く同感ッ！真理ってもんをわかってないッ！誰だその物好きなヤツ。」

「えっと……、優しそうな雰囲気は無口な男の方と背の高い肩にいつもカゼネズミをのせてる男の方と、それととても心の強い女の方です。」

あ、知り合い。

アウラを部屋に残していった俺とゼット君は家の外に出ました。中では今頃楽しそうにお茶の準備をしているハズです。目が見えないのにちゃっちゃとするその姿は咽の使えない俺には眩しく見えました。

どうします？これから。

「うーん。ジークフリードの旦那はどこにいるかわからんしな・・・」

多分ファルガイアには居ると思いますけどね。俺達も居るし、多分ロディ達も。

「・・・そうなんだろうけどな・・・。こっつ、その、うーん・・・。
。お前はどつすんだ？」

俺ですか？俺は、うーん。どうしようか。うーん。本来はすぐにアルハのつつあんと連絡とって合流するのが良いんですけど・・。

「うーん。そうなんだけどさ、いや、そうだからこそか？うーんッ・・。」

「・・・・・。この町魔物ばかりですね。」

「・・・・・そうだな。」

「・・・・・。俺、町に情報収集とか行ってたじゃないですか。」

「おう。」

基本皆渡り鳥として話すんですよ。行った事も無い場所の話とかして、それは渡り鳥の俺なんですよね。

「・・・俺がな、ここに来た時。最初人間が居るの見て、俺に驚いて逃げると思ったんだよ。俺魔族だし？」

そうですね。俺も魔族ですけど。

「ところがどっこい。そいつは俺の怪我を心配しやがるしィ？俺が背負ってたお前の事も心配しだすしィ？あんまりうるさいと殺してやろうかとも思ってたんだ。だが。だけでも。だけれども。」

毒気抜かれたんですか。んで、泣け崩しに今と。

「・・・俺はお前と違って魔族の中の魔族だからなッ！町なんて行った日には烈々歓迎大サービスだッ！」

嫌みですか。でも、そうですね。

こんこん。

「あの、お茶の用意出来ました。」

「お、おうッ！サンキューありがとまた来てシカクー・・・。」

「？それじゃあこちらへどうぞ。」

ゼット君がものすごく混乱してますね。彼は大丈夫でしょうか。
ひとまずお茶会です。難しい事はもうちよつと後回しにしましょう。
最近の怒濤の展開に疲れました。美味しいお茶が飲みたいです。
その後、家に入って、楽しそうなアウラさんと緊張してるのか慣れ
てないからかあたふたするゼット君がとっても印象的でした。

開幕デビューを転けたと思ったらこんな所にデビュー戦が。お茶の
間のアイドル。良いかもしれませんね。

その14 『にくいあんちくしょう』（後書き）

疲れたのは作者です。お疲れさまです寝ます。こんな展開ですみません。すみません。すみません。

エイルはゼットにひっぱられて来ました。ジークの旦那じゃなくて良かったね。

今後の展開はF要素を居れるか否かに掛かっている。掛かっているたら掛かっている。

その15 『白い大地へ』

アウラさんの家にお邪魔してからずいぶんと時間が過ぎました。その間に最初人間に慣れない素振りを見せていたゼット君も大分慣れたようです。

少し前に起きた地震の時も彼なりに必死で机の下に隠そうとしてましたし。結局強引に入れて、アウラさんが頭を打ったりしてましたけど。

その様子にゼット君が救急箱ひっくり返したりと、微笑ましいものを見せてもらったりしましたが。というか、俺の存在忘れてますよね。いろんな意味で。

俺達もずっとアウラさんの家にお邪魔しているわけではありません。今回は先程話しました地震について調べる為に遠出をしました。普通の地震ではないですね。いろんな所から竜巻が起きたただの津波があったただの地面が割れたただの聞きました。・・・やっぱり、魔族の仕業なんですかね。

軽い調査ですので所在とかまでは探すつもりはありません。喋れない、いつもの動物達もない俺では情報収集にも限界がありますし。ゼット君と合流する前に、俺はとある場所へ行く事にしました。

??フォトストファイア後へ

その15 『白い大地へ』（後書き）

この先ご都合主義です。原作ゲーム展開に茶々は嫌ッ！という方は
ブラウザバックプリーズ??

オリ主物やつといて今更な発言な気がします。

その16 『アークティカ城』

どうも、情報参謀エイルです。只今極寒の地に来ています。寒いです。

俺がこのフォストフィアへと行こうと思ったのは、以前疑似ブラツクホールに巻き込まれた時見た夢が原因なのです。

あの時見た夢、白い事しか覚えていませんが。俺の知る白い場所なんてフォストフィアくらいです。懐かしさついでに見に行こうと思ったのですが・・・。

・・・・・・・・どこでしょうか、ここは。

今、目の前にはなんだか強固な作りの城がありました。

カウボーイハットを取って確認。・・・どうやら道を間違えたようです。アークティカ城に来てしまいました。

そう言えばフォストフィアのお隣さんでしたっけ、ここに来た事ありませんでした。

ここにマザーの本体があっただけでしたっけ。アルハのつつあんとジークの旦那が取り返したハズです。俺はその時何してたんだっけ。

城の入り口でぽけーっとしてましたら。背後から足音が聞こえて来ました。デジャブを感じる。3人分。

「ッ！？あなたは・・・ッ！」

後ろをく振り返るとそこにくロディ達です。予想通りです。ゲートジェネレーター以来ですね。お久しぶりです。そして俺は逃げます。

「待てッ！」

待てと言われても待てません。カウボーイハットを投げ捨てて逃走です。

よくよく考えるとその時俺は別に逃げなくても良かったのかもしれませんが。別に今ジークの旦那達とつながりがあるわけではありませんし。

それでも、なんというか。彼等と顔を合わせると気まずさに襲われそこに居る事が出来ませんでした。

そう言えばロディ君の左腕が復活してましたね。どうやったんですか。とりあえず元気そうなのでよかったのですが。

俺はアーケティカ城を走り抜けました。初めて来るハズのこの城の中を俺は迷う事無く走り抜けます。

途中。黒髪の男性が見えたような気がしました。勿論誰もいません。俺の見間違いか気のせいでしょう。ですが、それを見たと思った瞬間。俺の鼓動は突然早まり俺の足はもっと早く走るようになっていました。

ちらり。と金髪の2つの剣を持つ男性が見えた気がしました。

ちらり。となんだかへっぴり腰な男性が見えた気がしました。

ちらり。と金髪の剣士が見えた気がしました。髪、短い、ですね。

ただただ走り抜けた後。俺は2つ目のエレベーターに乗りました。そんな距離を走ったわけでもないのに汗が止まりません。息切れも酷いです。最近運動していなかったので体力が落ちたんでしょうか。時折、目の前の風景に別の何かが見える気がします。幻覚まで見えるのは大変危ない証拠ですね。そろそろガタが来てるんじゃないか。たしかこの体も大分無茶をしてるはず。

エレベーターを降りて、先に進みました。

廊下を抜けて、広い部屋へとたどり着いた俺の目の前に、赤い髪の女性が立っていました。

・ ・ ・ お久しぶりです。待ち人はまだですか？

幻覚と一致する彼女。それは、俺がどこかで見たことのあるふうけいでした。

その16 『アーケティカ城』（後書き）

ゲームでこの城のイベント見て、鳥肌立って、この展開止めようかどうかでしょうかと思った結果。結局やる事に。すでに伏線は引いたんだものッ！ものッ！

駄目な方ごめんなさい。本当にごめんなさい。すみませんったらすみません。以後裏OPです。

その17 『一方通行の思い出1』

炎上する城。

燃え上がるその城は今まさに魔族の進攻にあっていた。

至る所で何かが焼ける匂いが充満し、至る所で何かの叫び声が聞こえる。

その一行は襲いかかる魔物を切り伏せ、エレベーターへと乗り込んだ。

乗り込んだ者達は全部で5人。

一人は黒髪、隻眼の男性。

一人は金髪、2つの剣を持つ男性。

一人は金髪、鞘に収めた剣を持つ男性。

彼等フェンリルナイトに守られるようにしてその場に立つ黒髪の男性一人。と、救護員の男性が一人。

「ええい。余は疲れた！もちつとゆるりと走れぬのか！」

エレベーターの中央に立つ男性が声を上げる。息も荒い。相当疲れているようだ。すかさず救護員の男性が近寄り様子を見る。その声を聞いた黒髪の男性？フェンリルナイト団長は答える。

「おそれながら。敵の目的がわからぬ以上たてるべき策はございませぬ。さすれば王弟殿下の御身を守るのが我らフェンリルナイツの使命でございます。」

礼儀正しくそう述べる団長に王弟殿下は兄が倒れた今自身が陛下である主張する。

その様子に軽い舌打ちをするのは金髪の剣士？ギャレット。隠すつもりも無いその舌打ちと言葉に団長からの叱咤が聞こえる。

目的もわからぬ突然の襲撃に苛立っているのだろ。救護員の男性はギャレットを横目にその他団員の治療を進めて行く。

その時。突然上から奇声が発せられた。

その声とともにこのエレベーターへと飛び降りて来た魔物を、フェンリルナイツ達は一線をもって難なく切り伏せる。自身を護る彼等の強さに殿下もご満悦のようだ。

2つの剣を鞘へと収めた金髪の剣士は少し考えた後、何かに気付いたように声を上げる。

「コルドバード団長。魔物どもはあのマユを狙っているのでは？」

「マユ、か……。考えられないことではない。だがなライアン、あのマユにいったいどれ程の価値があるというのだ。」

「なに！？彼奴らの目的は余のマユであるとうのか？ならぬ、コルドバード！アレを彼奴らに渡すわけにはいかん！ロクなことに使わないに決まっておる！！」

陛下の言葉の後、もう一度ギャレットから舌打ちの音が聞こえた。それとほぼ同時にエレベーターが止まる。目的の場所は今すぐである。

陛下を護るようにして彼等はエレベーターを降りた。陛下の言葉通り、彼等はマユの元へと急いだ。

その17 『一方通行の思い出1』（後書き）

きつとそのうち書き直すだろう。どの程度ゲーム台詞を入れていいかわからない。

その18 『一方通行の思い出2』

彼等はマユの前へとたどり着いた。マユが無事だと言ったことを確認した陛下から安堵の声が聞こえる。

マユの無事を確認後、何者かの足音がその場に木霊した。足を引きずっているような足音。その足音は大きくなっていき、時期に彼等の前に赤髪の女性が姿を現した。

「エルミナ！」

赤髪の女性？エルミナの姿を確認したギャレットが名を呼びつつ彼女に駆け寄った。それに続いて救護員の男性も近寄る。

近寄った救護員はエルミナの無事に胸を撫で下ろした後、彼女の足の怪我に目をやり、直ぐさま彼の本業を開始した。

「『斬り姫』とも呼ばれたあたしが足手まといとはね……。それよりも団長、他の仲間たちは……。」

「ウム……。。」

明確な言葉を団長は発しなかったが団長の様子と仲間の様子からエルミナは何かを感じ取ったようだ。今この場にいる者以外は全滅だ、と……。少しの間、その場を静寂が包み込んだ。

ガッ！！

突如、彼等のすぐ側に斧が投げ込まれて来た。

ライアンが斧へと駆け寄る。その場にいる誰もが見たことがあるその斧は、彼等の仲間の物であった。

「ライアンッ！！」

斧へ手を触れたライアンが突如彼等の前から姿を消した。いや、消されてしまった。騎士を一撃で消し去るその威力。陛下が地面に手をついた。その威力に恐れたのだ。

次から次へと流れるように時間は進む。嘆く暇も与えず彼等の前に新たな敵が現れた。

「お初にお目にかかります。私はアルハザード、ご覧の通り魔族でございます。」

白いローブに身を包んだ魔族は至極丁寧に名を乗った。魔族。

「冗談きついで、魔族など伝承の時代に滅びたはず！」

「ですが、現に私はこうしてここにいますよ。あいにくと時間

がありませんので早速、取引といきたいのですが……。どうです？」

取引内容は彼等がマユと呼ぶものをアルハザードへと譲る。といった内容だった。彼等フェンリルナイツはその取引に応じる気はないが、陛下は違ったようだ。

「するッ！何でもするッ！」

よつんばいに手をつきずるとアルハザードへ近づく陛下。団長の制止の声にも耳を貸さず陛下はアルハザードへと命乞いを始めた。そして、その命乞いに魔族は、

「申し訳ございません。こちらが用意したのは『苦痛を伴わない死』のみでございます。」

そう、答えた؟؟？

その18 『一方通行の思い出2』 (後書き)

長い。後もう少しです。

その19 『一方通行の思い出3』

ただひたすらに出口へと向かって俺達は走った。

団長はギャレットとエルミナ、それと俺にこの出来事をファルガイア中の人々に教えるように言った。

隣を走るエルミナは足の怪我のせいか走りにくそうにしている。いつもなら彼女は俺よりもっと早く走ることが出来るのに。前を行くギャレットを、俺とエルミナで追いかけた。

合間に休憩と言う名の治療の時間を挟んでもらった。早く逃げないといけないのだがギャレットもエルミナも酷い怪我だ。もうほとんど俺の持っている治療道具も底をついているが無いよりましだろう。2人にベリーと包帯を渡す。彼等も騎士だ、応急処置程度なら自分でも出来るだろう。荒くなった呼吸が収まれば、自然と俺達を逃がす為に残った団長についての話になった。

「くそッ、騎士団長が……。他の仲間たちもきつとあの野郎に……。」

「……。なあ ギャレット。あんた意外に臆病なんだな。」

「!? な、何だつてんだよ突然……。この俺が臆病だつて?」

「そっ、あんたには勇気がないよ……。」

勇気。エルミナはギャレットが刺し違えてでもあの魔族を倒そうと思っている事を勇気がないと言った。無駄に命をかけることが『勇気』なのかと。

確かにギャレットもエルミナも強い。俺より断然強い。でもきつと

2人掛かりでもあの魔族は倒せないだろう。怪我也酷い。

俺は同期の2人へととなけなしのベリーを渡す。エルミナもギャレットも喋れない俺に良くしてくれた。この2人に死んで欲しくない、勿論俺も死にたくない。さっきのベリーもこのベリーも逃げる為の物。それが伝わるだろうか、声に出せたら良いのにな。

「ひどい怪我・・・。」

「エルミナほどじゃないよ。」

エルミナは彼女のお気に入りのおボンを手にとると包帯代わりにギャレットに巻いた。包帯が足りない。

もう俺の救急箱も底をついたようだ。頑丈な鞆は武器にも盾にも使える。要らない物をその場に放り出して鞆を閉じた。エルミナもギャレットも、もちろん俺も傷だらけだ。

「・・・認めない。こんな無茶をしてかなわぬ敵に突っ張ることが『勇気』なんて、あたしは認めない！」

「じゃあ、エルミナのいう『勇気』って・・・。」

そこまで話した所で、魔族の声が木霊した。どうやら休憩はここまです。エルミナの退くという言葉にうなずいて、俺は二人を追って駆け出した。

走って逃げる。最初は同時に走っていた俺達だが時期に差がついて来た。一番前はギャレット、次に俺とエルミナ。

俺はただの救護員だ。走ったりの運動は得意じゃない。エルミナは足の怪我が原因で早く走れないようだ。彼女と合流するのがもう少し早ければもう少しましな治療が出来た筈だった。

少しずつ俺とエルミナからギャレットが離れていく。

出口付近まで来た時、その差はもっと顕著に現れていた。エルミナと視線があう。きつとエルミナも同じ事を考えたんだろう。俺の体力とエルミナの足では逃げ切れない。

エルミナが俺に先に行けと目で合図を送った。送られた俺は先を走るギャレットを見た。

そして、首を横に振った。

驚いた表情のエルミナに俺は空になった鞆を見せる。死にたくないが、俺がついて行ってもただのお荷物だと、エルミナは俺の動作から察してくれたようだ。

ギャレットが一步、城の外に出た。城の出口までたどり着いた俺とエルミナは、静かに城の門を閉じた。

その19 『一方通行の思い出3』（後書き）

門・・・？で良いのだろうか。彼は最初から喋れない方です。この
お二人さんの間にちゃちゃ入れるのは無理です。

その20 『一方通行の思い出4』

「！？何をしているんだエルミナ！」

城の門が閉じた事に気付いたギャレットが声を張り上げた。俺もエルミナもギャレットの方を見ずに背中を向けた。背後からギャレットが門を叩く音がする。

「あたしの怪我じゃ、逃げ切れない！」

「扉を開けるッ！エルミナ！！無駄に命をかけることが『勇気』でないって言ってたのはいつたい誰なんだ！」

エルミナの声に、ギャレットがさらに声を張り上げる。

背後ではまだギャレットが門を叩く音が聞こえる。俺は静かに2人の会話を聞いていた。足下がぐくぐくする。戦場に立つのは初めてじゃないが、死ぬとわかつているのは初めてだった。

この戦いからは何も生み出されやしないと、エルミナは言った。そして何も生み出さない代わりに何も失わせやしないと、大切な何かを守るために命をかけることを無駄とは思わないと、そう言った。

「開ける！エルミナ！！俺だって……。一緒に戦う！扉をあけてくれッ、エルミナ！！」

「あんたはこの事態を世界中に伝えなきゃいけないんだ！心配しなくてもいい……。あたしだって『斬り姫』と呼ばれた騎士さ、こ

こでくたばるつもりはない。

第一、あんたにまいたそのリボン、高かったんだぞ……。そいつを返してもらうまでは、死んでも死にきれないじゃないか。」

そこまでエルミナが言った後、見計らったのかのように魔族？アルハザードが現れた。エルミナは剣を構えて言う。

「『勇気』を持って、そしてフェンリルの想いを各地の同士に！走れギャレット！！あんたならどんな困難にも打ち勝てる！」

ちらりと、ギャレットが俺の方を見た。俺はギャレットに向かって軽くうなずいて、ギャレットの持つリボンを指差した。俺はフェンリルじゃないけど、俺の想いもそのリボンに。

「……リボン 必ず 返す……」

ギャレットが走り去る音が聞こえる。少しずつ小さくなる足音はしばらくした後、城の喧噪に消えた。

目の前には魔族アルハザード、隣にはエルミナ。この先は行き止まりです。引き返す事も出来ませんけどね。

魔族はエルミナに出会えてご満悦のようだ。楽しそうに不思議な笑い声を上げている。

エルミナが、魔族へ向かって駆け出す。

そして、大切な何かを守るための戦いが始まった????

巨大で不気味なマユの前に青い鎧を身にまとった魔族が佇んでいる。人間のいなくなったその城に立つのは彼の魔族のみ。気味の悪い鼓動が辺りに木霊する。

わずかな閃光の後、魔族アルハザードがその場に現れた。

そして、数年の時間が流れる・・・

その20 『一方通行の思い出4』（後書き）

以上、裏OP編でした。お疲れ様です。

次は元の時代にもどります。ギャレットが名前を呼んでくれません。決めてもいませんし、呼ばれると何かが崩れそうなのでこのままです。

その21 『散りゆく華の芳香』

目の前で、レディ・ハーケンとザックの一騎打ちが行われています。戦いはほぼ互角、ですがわずかにザックの方に武があるようです。同時に打った早撃ちは、わずかにレディ・ハーケンが遅かったらしく、彼女の愛鎌アズエルはザックの早撃ちにはじかれました。最後の早撃ちが打たれます。ザックの鞘から抜けた剣は迷う事無く、レディ・ハーケンを打ち抜きました。

「やっと・・・一人前の騎士らしい顔になったじゃないか。」

崩れ落ちるレディ・ハーケン。強固な鎧は取り払われ、かつて見た彼女がそこにはいました。ザックが崩れ落ちる彼女をとっさに支えます。

その場に眩しい光球が現れました。不思議そうにみつめるザックに彼女はそれはザックのここをが放つ輝き、不可能も可能とする『絶対たる力』。ザックの放つ『勇氣』の輝きだと教えました。

ザックは彼女にもうしゃべるなと願います。ですが、彼女は喋り続けます。

不意に、彼女が目を閉じました。ザックの焦る声が聞こえます。もうそろそろ、彼女の力も尽きるでしょう。俺はそういう職についてました、まだまだ患者を見る目は衰えていません。

「お、おいッ！目を開いてくれッ！！」

「この城で散った騎士からお前あての言葉がある、聞いてくれるか？」

彼女が、言葉を発しました。

『どんなに退屈で、つまらない世界でもここは、おまえとあたしが出会った世界。．．．だから、守って．．．』

それが、エルミナの、最後の言葉となりました。

ふと気付くと、俺はアウラの家の前に立っていました。頭の奥に、ザックから声をかけられたような記憶があります。今の俺はザックに何も言う事は出来ませんでした。咽的にも、俺はこの先ザックに何も言えません。

今日は色んな事がありました。思い出したせいか頭が痛いです。アウラの家の前から立ち去ろうとした時、中から俺を呼ぶアウラの声が聞こえました。続いてゼットが家から出て来ました。

暫く思案した後、俺はひとまずアウラの家へと足を踏み入れたのでした。

その21 『散りゆく華の芳香』（後書き）

以上。書きたかった所は終わった。

アルハのとつあんがエイルを魔族にした理由は、エルミナの前のお試し実験みたいな設定です。

エルミナで失敗したくなかったので、みたいな。だからハーケンより先にエイルが稼働してます。

一応、今までのエイルの台詞で彼がガーディアンブレードを見た事が無い事、ハーケンとエイルが同じような事情の事等はそれとなく言ってます。

ザックとの絡みが多いのもこの為。ザックは・・・フォトストフィアの時に気になって、ハーケンの事がわかると同時にエイルの事に気付いた感じですかね。

コートセイムの時は気付いてません、絡んだのは覚えてない無意識というか。

その22 『怪力招来ッ!』

あれから数日、アウラにはバレてるようでしきりに心配されます。ゼットは気付いてません。彼の賑やかな所に救われる節もあるのでありがたいのですが。

しばらく考えて、どうしようかと悩んでいます。レディ・ハーケン？エルミナはザック・・・ギャレットに打たれました。彼女は魔族として生き、望んでギャレットに打たれたようです。俺はそう見えませんでした。

さて、俺はどうしましょうか。さて、どうしましょうか。

しばらく1人で考えていた俺は、悩む想いに1つの答えを出してアウラの家へと歩き出しました。

セント・セントールの入り口まで来た所で俺は足を止めました。止めざるを終えません。なんで入り口でドンパチやってるんですか。入れないんですけど。

何故かロディ達、ザックとセシリアとロディが町の入り口で・・・。ゼ、ゼット？と戦ってました。

あ、今ゼットが高らかに宣言しました。モンスターゼットと言うそうです。なんじゃそりゃ。

かつてゲートジェネレーターで見せようとした怪力招来はコレの事だそうです。強いぞー、植物っぽいぞー。

そんなゼットを彼等はぼこぼこにしていきます。皆さん本当に強くなりましたね。かのアーデルハイドの頃は俺でも勝てる強さだったんですけどね。

ザックの戦い方が今まで見た物と違う事に気がつきました。エルミナの件は彼の中の想いも変えたようです。

最後の一撃がゼットを貫きました。

「ちょ、ちよつとタンマツ！人の心があるならば話くらいは聞いてくれ。トドメをさす前にあなたの大切な時間のちよっぴりを俺様といっしょにすごしてみないか？」

さて、ゼットがやってきたロディ達にぼこぼこにされてから暫く。何故だか今俺はロディ達と一緒にいたのです。

理由は簡単。さっそうと去っていくゼットが町の入り口で立ち尽くす俺を見つけたからです。その時の俺はかつてロディ達に初めて会

った時の渡り鳥の格好だったのですが、何も考えずにゼットは高らかにエイルと俺の名を呼びました。

勿論目線はこちらに向きます。俺の名前はフォトストフィアの時の宣戦布告の時に俺も名乗ってますので向こうも知っています。

セシリアもロデイもびっくりしてます。ザックは別の意味の驚きでしょう。俺の今の心境と近い気がしますね。

その後、流れるようにゼットが事情説明をしてくれたおかげで俺はロデイ達の側に自動的に移動。

軽い挨拶の後、ゼットはさっそうと去っていきました。いや、ロデイとも念話は出来るけどさ。

ゼットとの戦いの疲れもあって今日はロデイ達もセント・セントーに泊まる事に。俺もたまにお世話になっている町の宿屋に、俺も一緒です。元々今日は泊まるつまり出来てましたし。

夜遅く、晩ご飯をアウラと食べた後、俺はようやくとザックと一対一、面面向かって話す機会を得たのでした。

その22 『怪力招来ッ!』 (後書き)

アウラが無印では名前無い事に今気付いた。・・・まあ、名前ないと不便だし。

その23 『消えてく言葉の最後の思い』

使われてない家にお邪魔しました。机の側にあった朽ちかけた椅子に座ります。机の上には白い紙と羽ペン。昔から話す時はこうやって会話していました。

静かな時間が過ぎます。なんと切り出して良いものかわからないからです。最初にこの静寂を破ったのは、自分でも思うのですが、意外にも俺からでした。

静かな家に俺が文字を書く音が響きます。その音に気付いたギャレットが俺の手元を見ました。俺はそれを確認した後、さらに文字を書き続けます。

内容は、まずはと今までの事を書きました。アークティカ城の後の事です。俺がどうしてたか、何をしたかをつらつらと書き続けました。

書ききった後で、いったん手を止めました。

そしてまた、ギャレットに喋る隙を与えないように文字を書き始めました。

次は、俺がこれからどうするかについてです。ギャレットもこれが聞きたくて今ここに居るのでしよう。

俺は今までハーケン程ではありませんが人間に対してあまり好ましい事をしていません。コートセイムやこのセント・セントールの件についてなど、一枚噛んでいたと言っても良いでしょう。

そんな俺が今更かつての人間に戻る事は出来ません。エルミナの気持が良くわかります。ギャレットには悪いですが。

俺は魔族のエイルだと、そう書いた後ギャレットの顔を見ました。

悲しそうな、何とも言えないような。俺はまた続きを書き始めました。

次は最近の出来事です。ゲートジェネレーターより後の事。ゼットが軽く説明していつてましたが、俺からの思いを知って欲しかったからです。

アウラの家に世話になった事、それからなんとなくゼットと2人でアウラの世話をしている事を書きつづりました。

もう一度、ギャレットの顔を見ます。先程の顔とは違う顔をしています。

「世話をしてたのか。」

ギャレットの一言にそうだと返答を紙に書きました。それから後に、俺は一番言いたかった事を紙に書きました。

ギャレットの知っている人間は死んだ。ここにいるのは、人間のアウラを守りたいと抜かす物珍しい魔族エイルだ、と????

さらに俺は文字を続けました。

かつて、彼の雪の降る地に立つ城で死んだヤツからの最後の言葉がある。聞きますか？言い回しはエルミナの言ったままです。そのほうが良いような気がしました。口元が思わず緩みます。

ギャレットの顔を見ました。彼は首を横に振ります。言葉にしくても伝わる。かつての昔にそんな事がありました。彼は今でもかつての様に、想いを言葉にしくとも汲んでくれたようです。

彼が、リボンを差し出して来ました。今度は俺が首を横に振る番です。

一度受け取ってから、ギャレットに返しました。俺が託した分の想いは受け取りました。後は彼女に返してあげてください。約束はちゃんと守らないとね。

思ひ話はそこまで、それから俺達は酒を飲み合いました。コートセイムで飲んだ時のような状態になりましたが、それは同時に彼の白い大地で出会った彼等の姿を彷彿とさせる物でした。

その23 『消えてく言葉の最後の思い』（後書き）

書きたかった所は書ききったッ！完ッ！！！！

ザックが一言しか喋ってません。大丈夫、酒飲んでる時にもっと喋ってます。

エイルは魔族として生きる事にしました。エルミナはギャレットの為自分の為にザックと戦い打たれました。同じようにエイルもギャレットの為自分の為にこの道を選びました。

ゼットとアウラがいなかったら多分エイルは死を選んだと思います。元々彼は人を救う救護員でしたからね。その逆になったとすれば気付いた後、誰も知らない場所で死を選んだと思います。

選ばなかったのはアウラを救えたという想いがあつたからでしょうか。魔族になりましたが魔砲メデイスンは人間でも回復してくれるチートアイテムですしね。

そうそう、メデイスンは救護員の彼が持ってた救急箱を改造した物です。だからこそのアタッシュケース。

■次回、あとかぎ的何か

あとがきのなにか *挿絵有り(前書き)

*真ん中くらいに挿絵有り。嫌な方はPCなら右上で挿絵設定変更を推奨。

あとがきのなか *挿絵有り

ここまで見て頂きありがとうございました。

この作品は説明にもあるように、読みたかった。無かった。じゃあ書こう。と言った感じで書きました。原作レイプと言われても仕様が無い。

一番最初は原作知識有りのトリップ or 転成↓フェンリルナイツの誰かという流れにしようかと思ったのですが、フェンリルナイツはキャラたつてて混ぜれないし、原作知識有りの魔族側はセント・セントールとコートセイムについて悩んで考えて無理だなという結論に至りました。無理です。

その間で一瞬だけ憑依↓ゼットなんて事も考えましたが、いけそうな気もしますが、台詞回しが出来ないのので却下。彼以外の皆さん台詞回しが難しいです。おかげで本編中も皆さん台詞はが少なくなりました。ほとんどゲーム台詞しか喋ってないよ皆。

次にゼット兄ないしゼット弟なんてもの考えましたが上記の理由と同じで却下に。後個人的にフェンリルナイツの誰かっていう設定が気に入ってたんです。

そんなわけでエイルが出来ました。武器が魔砲メディスンでよくエイルがアタッシュケースって言うてるのは最初のトリップ or 転生の設定がまだ生きてるからですね。この設定も結構気に入ってますので。

情報参謀の元ネタは・・・トラン フォー ーの情報参謀サウド フェー さんが元ネタです。好きなので、彼。

情報収集とか細かい描写は無かったと思ったので、自然に混ざるには良いかなと思い情報参謀になりました。基本雑用係ですが。

そうそう、エイルは元々は喋れる設定だったのですが、裏OP書いてる時に、このラブラブに混ざれと！?と思ったのと。ザックに心配される描写を書くのはむず痒かったので最初から喋れない事にな

りました。

■書きたかった事（順不同）

- 1、セント・セントール、コートセイムの話
- 2、アークティカ城ザックの過去のお話
- 3、エルミナとのお話（未だ未定）

こんな感じです。エルミナのはまだです。気が向いたら書くんじゃないかな。

■オリ主エイルの設定画

> i 1 9 9 2 3 — 6 8 5 <

やつとこさ、絵がでけた…

右：変装エイル 中：魔族エイル 左：過去編エイル と、なっております。

ぶつちやけ真ん中の魔族姿は残念だなあと思っている。絵が。デザインとか。

右の過去編エイルはWA2のセーブの人っぽいイメージで温かそうな服という感じ。装備は背中のリュックと左手の鞆。

左の変装エイルは、文章通りに描いたらこんなになった。カウボーイハットむずい。もう描きたくない…

■エイルさんの名前

エイルの名前の元ネタは北欧神話の女神さんから。神話、医療系で検索かけた後、アスクレピオスが名前はきついという事で女神だけとお名前を借りました。魔族なら神話からとらないとなー。

本当はクトゥルフ神話から取りたかったんですが、検索の仕方のせいかわからなかったのとおりあずな感じに。WAはクトゥルフ神話からの名前が多いんですね。

ちなみに彼の本名は不明。作者も知らない。これなんて（ジンガーズの）ボス？

■ 本編中のエイルの強さ

えーと。だいたいLv20のゼットくらいじゃないですかね。初期ロディ達は倒せますが、スウィートキャンディ号の頃にはもう無理です。人間の頃よりは強いんですけどね。

武器は魔砲メディスンですが、攻撃としてはひたすら殴るしか出来ません。ただ毎ターン回復とか、某RPGラスボスのベホマ（全回復）とかやってくるんじゃないでしょうか、うぜー。だれかもう一人居たら更にうざい事この上ない。

■ アークティカ城の頃のエイルさん

ギャレットとエルミナはミラーマ出身だそうで、へー。アークティカ寒くないのか。

最初リボン代わりに何か渡そうかと思ったのですが、ギャレットの手持ちが増えるので却下。

エイルさんは喋れないので引き取られた感じなんですかね。二人と仲が良くて、引っ付いてアークティカに来た感じです。あんまり考えてないのでコレくらいかな。同様にフェンリルナイツの皆さんも良くしてくたようです。

■ エイルさんの性格

喋り方はほとんど作者ままの喋り方です。多分性格も・・・？おそらく？

彼の座右の銘は「やらないで後悔よりやって後悔」です。ほとんどの物事はこれで突き通します。何選んでも後悔しない事柄については適当に済ませます。

本編最初のエイルはただただ何も考えずに魔族として行動しています。そのうち違和感に気付いて自分の思う通りに動き出しました。喧嘩は得意じゃありません。賭け事は結構好きですが一応破産しない程度に抑えます。自分の命を賭けても良いと思った事には遠慮な

くどすつと賭けます。ほとんどそんな時はありませんが。そういう性格です。

■ 今後の世界

エイルはこの後ロディ達について行ったのかどうなのかわかりませんが、世界は皆さんの知っている通りに救われ、ロディ達は再び旅にでました。

エイルはセント・セントールを本拠地に時たまゼットを通訳に引き連れて治療の旅でもしているんでしょう。

ミラーマの彼女に出会う話は、いつか書いても良いかなと思ったり。

■ 完結表記が無いよって言う話

小説家になろうでは完結作品は完結という項目にチェックをするのですが、この作品はチェックをしていません。

それはこの作品はまだまだ改造する必要があるからです。話的には完結していますが、合間の話をちまちま気が向いたら埋めたいなと思います。気が向いたら。

完結作品にしちゃうと新しい話が書けなかったりするんですよ。というわけでこのままです。

■ 嬉しかった事

ポイントがあつて、それを作品を読んでくださった方がつけてくれました。小躍りしました。本当にありがとうございます。

■ 今後の話

ジエーンも少ないけどバーソロミュー船長とエマさんは出会ってます。無いなと思ったり。

気が向いたら番外編なノリで他にも話を更新しようかと思っています。何気にWA2の話を同じようなノリで書こうかなと思ったり。どっち書こうか最初悩んでいたんですが、先に見通しがついたのがこっ

ちだったのでこっち書きました。

WA2ならこのエイルさんがWA2の世界に行く話か、マリナのお兄ちゃんなオリ主の話にするべきか、悩み中です。別にアシュレーが人外だから魔族いても良いしね。

WA5も考えてるんですけどね。ラスボスのグラムサンパーになんであんたが持つてんだとつつこみを入れて欲しい。WA3はプレイしたけど後半投げたので保留。ジェイナスとの絡みは楽しそうなのですが。WA4はやった事すら無い。

WA3、5は改変しまくりでしょう。作者がつつつこみまくりたいので。WA2はこの話みたいになるべくゲーム忠実にやりたいです。そんなこんなでどこかでお会いしたらまたバカなことやってんなと微笑ましい目線か白い目線かで見守ってやってください。

それでは、ご愛読ありがとうございます！

* 追記

WA2書いた。力つきた。作者にはまだ小説を書くだけのFPが溜まっていないッ！！ちなみにFPはMAX必要です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2973k/>

【WA】魔族情報参謀奮闘記(仮)

2011年11月12日20時08分発行